

## ◎踊り子

岩代  
須賀川町

服部水仙子

停車場から連らねた車が一步步々、賑かな町に近づいて来る時は、さすがに懐かしい思はしたが、まだ六つの頑是なさ、幸は決して踊り子となり下つた自分の身を恥かしいものとは思はなかつた。見れば思ひ出す臙ろ氣な覺えを辿つては邊りキヨロ／＼見廻すので、後の師匠に「幸ちやん何だねえ」と笑はれたが、何となく道行く人の顔々が皆見たことあるやうな氣持ちがしてならなかつた。二年前相應に暮して居た水戸屋が天理教に迷つて、家屋敷、田畑田地まで残らず寄進してしまひ、一家は夜逃げ同様の姿で此地を去つたのは誰しも知つてゐるであらうが、今度の祭禮に、元町の屋臺に乗るべく買はれて來た子供役者の一座のうちに、其末娘の幸が加はつて居ようとは誰しも思はないであらう。宿の内儀は名も知らぬ人も知らぬ、けれども顔だけは知つて居た。晝間お師匠に是々と身の上を聞いて、驚いた顔をしたつけがそれからは幸のことを一番能く世話して呉れる。無邪氣な、人懐かしい其性は誰にも可愛がられるのだ。夕餉にと連れて歸られた子等もまた段々と集つて來て、灯と花に裝飾られた屋臺に太鼓の音賑はしく、家毎の軒にさした紙花、日の丸の提灯。軒下に並ぶ諸々の店からカンテラの煙り流れて、ゴム風船に飛ばれて慌てる者、梨一つに寄つてたかる吹屋の店、僅か一錢のお慰みの文廻しに見惚れて背の子を泣かす子守やら、如露の水に飛び退いてはまた女子の寄つて來る酸漿屋、賑はしとよりは寧ろ騒々しい町内の有様を二階から眺めて居ると「幸ちやんさあ／＼お支度だよ」欄干に手をかけた儘振向くとお白粉の刷毛を持つてお師匠がお手招をする。素直に其前に座つてお白粉をつけて貰ふ。鼻の先を一段と濃くしながら「今夜は笠揃へで二幕だけだから確り遣るんだよ、よ千松！」と一寸其頬をつゝいて「さあ出來た、其着物を脱いで」今夜の出し物は御殿政岡。元の字のはいった揃への浴衣を脱ぎ乍ら幸は千松の臺辭を口の内に繰り返して居ると「幸ちやん舞臺に出て居眠りするんぢやないか」すると皆がどつと笑ふ。憎しい聲の起元はと見れば、嫌ひの嫌ひの咲と云ふ、年は十六の一座で一番の意地悪。鬢をつけた其顔を見ると此人が八汐に扮るのだ。たとひ芝居にもせよ、此人汐に殺されるのかと思ふと何となく嫌な氣持ちが爲る。鏡と睨みくらの面々も皆衣装の着付けにはじまつた。馬鹿囃子の音が近くなつて來たのでつと首を出して見ると隣り町の花車が此町内にはいつて來たのだ。屋臺の前には早や幕開きを待つ人の頭が黒く近い家の二階には人の顔がぞつくりと並んで居る。ふと下を見ると通る人が皆上を見上げて居るのでさすがに首を引込てしまつた。

拍子木の音一つ／＼に動揺めいてゐた人聲は静になつた。「後見送つて政岡が、まさなき

ことも身にかゝる……」

床より起る三味の音に連れて紅白だんだら染めの引幕はあけられた。幾百の人の目を見に引き受け乍ら、袴の下に手を置いて、赤く揃ふた人の顔を徐ろに見渡すのも場馴れたればこそ、此中には昔遊んだ友達も交つて居るであろうに。ふと幸は昔住んだ自分の家が今どんなになつて居るであらうと考へた。向ふの家のかげから頭ばかり見える半鐘を五六軒越したところが幸の家であつた。店は魚を商ふて居たのであつたが、今は誰が持家となつて、誰が何を商つて居るであろうか。



義太夫は益々進んで榮御前のお入りとなり、千松は工の菓子を食べ散らして殘酷な八汐の刃にかゝつて舞臺の上に倒れることになつた。観客は水を打つたやうにひつそりとなつた。寝ながらに幸は何を考へてゐるであろう？……そなたの命は出羽奥州五十四部の一家中所存の臍を固めさす誠に國の礎ぞやとは云ふものゝ可哀やな……張りつめて居た氣も恚うなつてはゆるんで來て幸は何となく眠氣を催して來た。……謳ふた歌に千松が七つ八つから金山へ一年待てどもまだ見へぬ二年待てどもまだ見へぬ……あたゝかい母の背中に子守歌きく昔にかへつて幸は全く舞臺の上に睡つてしまつたのである。幸といふ名を與へながら如何に貧困つて居るとはいへ恐ろしい人中に子を賣つた親を怨みもしないかはりに、師匠夫婦が僅の愛の影に世の荒浪知らぬ幸が夢は、そも何の上を辿つて居るであろうか。

【入力者注】底本は総ルビですが、一部のみ残しました。

初出・底本…「女子文壇」明治四十年第八号

テキスト入力…小林 徹

公開…令和六年十月三日

リンク…[水野仙子作品年譜](#)